

現代ラテン語の音声

中村雅之

20年ほど前に、一人のスペイン人を囲んで食事をしていた時、話がラテン語のことに及んだ。私のラテン語はほとんど忘却の彼方であったが、唯一まだ覚えていた「コギト エルゴスム」(cogito, ergo sum. 我思う、故に我あり)を発してみたところ、そのスペイン人はすかさず「コヒト エルゴ スム」と言い直した。スペイン語では「gi」は[xi]であるから、当時スペインではスペイン語風の発音でラテン語を教育していたのであろう。(あるいは今でもそうかも知れない。)

もちろん、これはスペインに限ったことではなく、当時の東京のフランス語学校「アテネフランセ」でラテン語の講座を受けた人の話では、そのクラスの先生の発音がことごとくフランス語風であったというし、教会ラテン語の標準たるヴァチカンのラテン語はイタリア語風の発音であるらしい。さらに英語圏におけるラテン語教育においては、これまたことごとく英語風の発音で教えられることが多かったようで、アメリカで教わったラテン語は他の国では通じないということも珍しくはなかったという。

しかし、こと音声教材に関して言えば、ここ20年ほどの間に事情はだいぶ変わっている。私の手元にはイギリス人、ドイツ人、フランス人の録音になるラテン語教材テープがある。また、フィンランドのラテン語放送(ラジオ)はインターネットを通じていつでも聴取可能である。それらの発音を聞き比べてみると、以前の状況とは異なり、各国の訛りは極端な形では聞かれず、ほぼ同質と言いうるものになっている。本稿に「現代ラテン語」と称するのは、これらの音声教材およびラジオ放送を指している。

現在各国から発行されているラテン語の音声教材は、基本的に古典期のラテン語の音声を復元したものになっている。古典期とはおおむね前1世紀～後2世紀をいう。ラテン語を古典期の発音で読もうとする動きは19世紀末からあったが、なかなか広まらなかった。フランスでは古典的発音に反対して自国風の発音を守ろうとする組織さえ設立されたらしい(cf. 大西英文著『はじめてのラテン語』p. 24、講談社現代新書、1997年)。

古典期の発音の主な特徴は「c」「g」が「i」「e」の前でも[k][g]と発音されること、そして「ae」「eu」などが文字通りに二重母音として発音されることである。原則としていわゆるローマ字読みと考えてよい。

各種の音声教材は基本的に古典期の発音によるとはいっても、なお各国特有の“癖”があるようで、いくつか微妙に異なる点がある。

- (1) 「ae」: 仏・独では[ae]、英では[ai]、フィンランドでは[e:]
- (2) 「qu-(qua/que など)」: 英・仏・独[kw-]、フィンランド[kv-]

(3) 「-gn-(magna など)」：仏・独[-gn-]、英・フィンランド[-ɲn-]

例えば「quae」などは(1)と(2)の組み合わせなので、仏・独[kwae]に対して、フィンランドでは[kve:]となり、聞いた印象はかなり異なる。

面白いのは「-gn-」の発音で、仏・独が「g」の部分破裂音とするのに対して、イギリスとフィンランドでは鼻音となる。イギリスではテキストにおいても、母音間の「-gn-」は「-ngn-」のように読む、という説明がなされている。ラテン語の子孫たるロマンス諸語を話す国のテキストにおいて、そのような説明がなされている例を知らない。そもそもイタリア語・スペイン語・フランス語においては/ɲ/という音素が存在しない。16世紀後半に中国に渡ったカトリックの修道士たちが中国語をローマ字で表記した時、音節末の「-n」と「-ɲ」の対立をそれぞれ「-n」と「-m」で記すことがあったのは、彼らが母語に音素/ɲ/を持たなかったからである。「magna」を[magna]と発音するようなイギリスやフィンランドの習慣が、果たして古いラテン語の伝統を引くものか、後に独自に生じた習慣かは寡聞にして知らない。

以上のほかに、フランス人の録音によるものは、「r」をあたかもフランス語のように口蓋垂で発音したり、「ca」を時にパリのフランス語風に[kja]としたり、あるいは「h」を発音しなかったりと、微笑ましいほどフランス的な部分があるが、これは愛嬌であろう。

母音の長短については、フランスの録音では全く無視され、イギリスではアクセントのある部分の長短は明瞭であるが、他は曖昧である。フィンランド放送とドイツ人のものは比較的長短が区別されている。

音声の特徴は以上の通りであるが、教材としてはイギリスの録音が断然優れている。吹き込み者の熟練度、効果音、英語による短い説明の挿入など、耳に心地よく飽きの来ない構成になっている。フランスのものはあまりにも速度が遅く、またフランス語訛りもやや目立つため、長時間聞いているのが辛くなる。ドイツ人のものは発音はきれいだが、会話を一人で読み上げており、やや表情にとぼしく単調な気味がある。フィンランド放送は現代のニュースなので、内容的には古典ラテン語と直結しないが、まさに生きたラテン語という意味では聞く価値はある。

参考にしたのは以下の教材である。

G. D. A. Sharples, *Beginner's Latin--An Easy Introduction*, TEACH YOURSELF BOOKS, 2002¹⁰
Balme&Morwood, *Oxford Latin Course*, Oxford University Press, 1999

C. Desessard, *Le Latin Sans Peine*, ASSIMIL, 1966(今回利用した第5版の発行年は不明)

有川貫太郎他編訳『現代ラテン語会話』、大学書林、1993(録音はドイツ人)

フィンランド放送のラテン語ニュースについては、インターネットで「yle nuntii latini」で検索すれば見つかる。